

# 三昧無為即涅槃

## 常住の巻

大ミオヤ……………一

永恒常住の靈界……………二

三昧無為即涅槃……………三

如來の三身……………四

応身……………九

如來の勢能……………一八

願行……………一九

四摂……………二〇

御消息……………二一—四二

### 大ミオヤ

如來を三身各別に説くは方便教である。三身即一を説くは眞實教である。しかれば如來は絶對にして空閒時間を超絶し永恆の存在なり。本有常住の無量壽佛なり。十方三世一切の法報應變化身の本地なり。其本有の彌陀が本來絶對の大靈界に在ましてあれども、相對生死の方面に發生せる衆生に對して、三身を現す。即ち自覺の方面は天則秩序を統一し擔保する天原則としては法身と名づけ、また如來自性の靈界に攝取せんが爲には報身の大光明者と現じ、衆生を教化の爲には應身と現はれ、大經に錠光佛乃至五十三佛も、世自在と同じく、法身常住無量壽佛の分身應現にして、また法藏因位十劫果成も同じく常住壽佛の慈悲應現なり。大ミオヤがすべての子等の攝取救度の方便身ならざるはなし。また法華壽量品の如來は本因無量壽にして、燃燈佛乃至三世一切の諸佛は即ち如來の示現なりと。西方の彌陀しやばの釋迦悉く本有常住無量

壽の示現にあらざるなし。宇宙の本體に永恆存在あり。彌陀即ち其本體である。眞實如來である。今も現に此處に存在し給ふ。永劫常然として在し給ふ。永遠のロゴス何時か盡る期あらん。

### 永恒の常住の靈界

極樂は無爲泥洹の都。經には國泥洹の如しと説き、導師は極樂は涅槃界と呼ぶ。涅槃は當然の靈界、無始無終の一切諸佛の安住する處。釋尊無上正覺の曉に證得し給ふ處を大涅槃界と名づく。釋尊は爾來常に神は涅槃界に安住し、さればすべてに勸めて常住の涅槃を示し給ふ。釋尊及びび聖者の證入する涅槃界は常樂我淨四徳莊嚴の境、眞善美の極まれる處、佛教多門なれども歸する處涅槃に入ることのみ教ふ。彼靈界は清淨無比の莊嚴五妙境界の故に淨土と名づけ美天國とも曰ふ。如來大法樂の快樂安穩の故に極樂または妙樂の界といふ。また無量光明土とも、無量壽國とも、常寂光土ともまた蓮華藏界、また密嚴淨土と云ふ。名は異にして其の體は一なり。

涅槃界絶對にして一切處として然らざるなし。何ぞ方所あらん。衆生は絶對なる涅槃界に在りながら、自ら生死の中に出没す。こゝに於て容易く涅槃常住の都に入るべき道を教へ給ふ。之を念佛三昧門と名づく。

### 三昧無爲即涅槃

是導師の讚文。導師此の眞理を自證し給ふ。此身このまゝ涅槃の常樂を感じらるゝは即念佛三昧なり。念佛三昧には一心にミタを念じて我を離るとき我即ち彌陀なり。宇宙は本來大ミタ佛なれども、衆生自から此雜然たる自然界を驗る。一心に念佛して自己の心ミタに同化するときは、一切處としてミタならざるはなし。彌陀在す處即ち大涅槃界なり。念佛三昧ミタと同體にして即ち三昧の常樂を感ず。この心境を不可思議の三昧涅槃と名づく。

念佛三昧を得れば心常に大涅槃に安住するなり。理想に於て極樂に逍遙するなり。極樂とは即ち彌陀の在ます處なり。彌陀身心遍法界何の處にか彌陀在まざるらん。但衆生自ら迷妄に没して見ること能はざるのみ。若し一心念佛してミダと心が相應する時は、此處に在て極樂を發見すべし。

若し此身心を離れて極樂を求めんとせば得すべき理あることなし。只須らく一心念佛して此心の中に於て絶對なる大ミオヤに冥合すべし、極樂に證入すべし。

### 如來の三身

法身とは天則秩序を統一する實體のこと、天則とは自然の理法のこと、たとへば火の熱、水の潤ひ、風の動、地の堅きは天則である。また眼が見る、耳が聞く、鼻が嗅ぐ、舌が味ふ、身の觸覺に於ても天則である。天則とは人の約束から成り立つた法ではなく、自然の理法である。柳の緑、花の紅、鶯の白き、鳥の黒きも、人の身體形成も精神形成に於ても天則、また生物が飲食にて榮養し、雌雄の交合より生殖するも天則である。萬物各天則を離れたるものなし。秩序とは萬物が天則に産出し成長するに秩序あり。地球は太陽に分婉せられ熱が冷却し外皮が次第に厚り現地球と成りて萬物を發生するに至りしも、秩序的に發達したる植物にも幹の精髓が果核を結び種となり、次に外包を出て次の幹となり葉と成り次第に秩序的に、動物にも親の精髓が母胎の外包をつくりて子の身體と成り其子と成りて秩序あり。天則秩序をはなれて生産し活動すべきものなし。

天則秩序を統一し擔保する理性を法身とす。

ミオヤは法身の權能である。然らば法身自體は何から産出せしやと云はゞ始もなく終りもなく法身自體に在る。一切處に徧滿せる永恆自存の心靈態である。目に見えねども實存することは、人の精神は無形にして存在するが如くである。全智天則の理性が萬物を産出するに其秩序の正しきを見よ。

人の精神錯亂する時は、文章にしてもまた書畫を作るにも、秩序なく體裁も整はず完全なるものを形成すること能はず。然るに天則が天體を造化するにも地球の萬物にしていかに植物學者が密に植物の構造及形成の理を知るもいかに植物を組織するのいたれる盡せることぞ。いかに工に妙を得たるものも造ること能はざる植物を自然的に造り、人の身體組織が解剖上より見るも實に妙を極めたるに驚かざるを得ず。また生理學上より見て實に精神榮養生殖の作用の如きより全體よく整へること唯造化の自然の妙を稱する外なかるべし。これには人類の如きの意識的知力にあらざるも、天則理性の知の理性なかるべからず。

全能いたらぬ處なしとは、宇宙間萬物が産出し活動するものとしてこの能力を離れて有ることなし。例へば地球萬物動物植物の如きの活動は、太陽のエネルギーに歸す若し太陽の力によらざれば、地球は枯渴して一の生物有機物もなきに至らんと。太陽の力と雖も其原なるべからず。其供養によらざれば太陽ひとり能力を與ふべきなし故に一切萬物の活動は法身の徧動を離れてあるなし。故に知る一切萬物は全知全能によりて産出し之に擔保せられざるものなし。

報身。所在は至眞至善美、眞理の靈界とも清淨國土とも常寂光土とも名づくべき一切の兪惡無明等の脱したる心靈界に在ます。人の心理的に云はゞ無明兪素質の離脱せし精神が觀する心靈的宇宙なり。

吾人の最高等なる宗教意識の欲望の對象なる神靈的理想の觀念界、未だ理想にして實現せざる神の國なり。

至善至美のきはみなる方面にまします、自然に塵數の相好光明ありて光顔威神無極萬徳圓滿したまふ。

其處は自然に種々の至善の莊嚴美を極め妙を盡す。金銀瑠璃寶石の高樓閣は九若に聳へ、寶樹寶林七寶と光色焔々として日月及び、八池水金波を爛かし五官の妙樂自然にして心像なり。

如來四智の光明は普く十方を照して一切衆生の心靈を開展し、此光明は周偏するも心靈に對する光明にして觀念的に觀することをうべきのみ。

一切の處にしても、至心に觀念する時は、心靈に此の光明によりて心靈開發し、一切の處如來四智の中ならざる處なきを意識す。神聖正義とは心靈開展したる心靈には如來の神靈態光明が法界に充ちてこれに對する觀念には自己の心靈に反映し、神聖にして侵すべからざる御あり。故に自律的に自己心靈に無上權威ありて、正義の勢力に對する觀念は自己の私を棄てて如來の正義に協力して義務的に活動せんとす。

めぐみの御名と如來無限の慈悲は法界に周偏して此の觀念には自づと自己が罪惡の闇黒も旭日に黒闇失へる如く、めぐみの觀念に無明の間はれ、己が感情が苦惱と罪過との中より脱却して靈福を感じ平和安穩となり、靈の意志として聖意の實現として道德的行動するに至る。

三徳とは法身般若解脱。前の般若とは神聖恩寵の光明なり。眞理と智慧と慈悲との光によりて正知見を開き、解脱の徳により苦惱罪惡より解脱し、靈化して如來の理想の淨土に生活して、この依身を脱すれば實在的に寂光淨土が實現して、宇宙として如來の至美界ならざるなきを知るべし。

### 應身

教祖釋迦尊は其本地は三身一體の如來。

三身とは法身報身應身。法身とは天地萬物の本體、一切は之より生じまた之によりて保存せらる。

報身はいと聖き美しき靈界に在していと麗しき相好といと美しき國に在して、智慧と慈悲との光を以てあらゆる世界の人類を攝取する如來。

應身は人格の身を以て世界に出て人類を救済する如來。之を三身と申します。釋尊は應身である。

報身とは法身の粹にて常樂世界に在して大白在の徳をもて慈悲心より應化身を示現して人類を救済す。

西藏の佛典にアマタ佛は聖き國に在して人佛シヤカの本地なり。アマタ佛大悲三昧より人佛シヤカを化現して人類を救済す。

八相應化は、人界に出たる化身の生涯の歴史であります。八相とは、生天、下天、托胎、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃を云ふ。

生天。釋尊が人界に出づるに先だちて天上のトシタの内院に在て天上と人界とを利生し救度し給ふ。この時を善惠ボサツとは名づけられたり。

下天。天に在して下生すべき時と處を鑑み給ひ、智仁兼備りたる父母と文化已に開けたる中國とをえらみて、カピラエ城の淨飯大王を父とし、マカマヤ夫人を母として四月八日に夫人體浴清潔にしたる清夜に於て、夢に空中に白象に乗り光明熾なる聖者が天女の爲に圍繞せられ、伎樂花香の靈感を得たる時に神を母胎に降し給へり。

降生。夫人ラビニ園に遊入し四月八日無憂樹の花いと麗しきを右手を舉げて之を摘んとする時、菩薩は右脇より生じ給ひ、現に七歩あゆみ給ひて正立して自ら聲を擧げて天上天下唯我獨尊と稱へて即ち妙なる光明を放ち給へり。

太子生れ給ひし日、五百の寶自ら現はるなどのよろづの善事集るを以て、シタル太子と名づけられたり。譯すれば最勝にして一切の事業遂ぐと言ふ美しき名なり。

香山に阿私陀と言ふ仙人あり。神通を具へり。太子誕生の瑞光を感じて、遙かに來りて太子の三十二相を具はるを見奉りて嘆じて曰く。太子の相好は必ず上なき道を成じて人類を救度すべき道を有し給へども、我齡已に老いたり太子の教化に遇ふことを得ざるを悲しむと。

太子幼にして學堂に在つて五明四吠陀等の最とも高等なる學術を修め、また禮樂射御書數など一切を學ぶに道として成ぜざるなし。

太子は輪王として四海を統御し萬乘の君たるべき御身にて、天下の榮を一人に聚む

べき果報いみじくもなれども、四門の遊びに老人病人死人の相を見て、世間の無常をさと、また異時に於て道人の静肅にして身心調熟し威儀の齊整たるを見て、益々感發して世の道の外に心靈解脱の大道あることをさと、道心彌切に發し給ひぬ

太子は伴つて執杖釋氏の女ヤンタラといふ賢婦を娶り給ひ、いとむつまじき閨門の中に於て王子ゴラを擧げしかども、大道心いと切にして殊に印度の民族的宗教及び道徳より、發展して人類の宗教と道徳を以て一切の人類を一慈の下に攝せんとする大道心よりつひに個人的幸福は勿論個人的道徳を犠牲にして、大志を起し、ために國と位とをも顧みざるに至る、顧みるいとまなきにいたる。

太子一日父の王に白し上るには、それ世間は生ける者は必ず死し會者定て離れざるを得ない。實に世はまことに怖むべきものなし、願くば我に出家を許させ給へ、我道成就せば、人類のため不死の門を開きて一切を救度せんと欲す、是我が願なりと。父王之を聞き涙に咽んで言ふ能はず。太子は少惠の爲に一切の人類を救度すべき大志を止め難くして、年十九歳四月七日の夜馭者車匿を具しケンチヨクてふ駿馬に駕して竊かに王城を忍び出でたまへり。

太子は城門を出で曉がたにバギヤ仙書行林に着して、馬より下りて玉體を飾る處の寶冠璣などを解いて之をシャノクに托して嫉母とヤンタラに遺贈し給ひ、また珍妙の衣をば脱ぎて自ら髪をそり除きて而してケサを着し給ひぬ。然してより山林をめぐり諸の道士につきて道を求む。アララ、ウトラタなどに法要を問ひしに、彼らが説く處未だ終局の眞理にあらざして辭して去り、自ら精修して發悟する外に途なしとて、ニレンゼン河の東岸なるガジャ仙書林に逝く。此地の樹林いとうるはしく水清く萎々たる草は縁の蓮を布たる如くなるを愛して此處に在つてもろもろの苦行を修め、日に一麻一米を糧とし無上正眞の道を得んとす。修すること六年の春秋をむかへ身體つかれ甚しく皮骨連立せり、一日ニレンゼン河の清流にいりて洗滌したるも氣力衰へて自ら出ること能はざれば、樹の枝によちてやうやくに上れりと。

個々そのほとりなる牧の長の女ナンダバラが献ぐる鹿の乳糜によりて氣力回復し、元の如くになりぬ。夫よりは南の方ガヤに到り、ヒバラ樹の下なる金剛座に於て、吉祥が施せる柔鞭草を敷て跏趺坐し給ひ、時に大誓願を發して謂へらく、我今正眞の道を證せずば、寧ろ此身を碎くとも終に此坐を去らずと。宇宙を全動せしむる意志の力はつひに天魔を驚動せしめ、ために魔王が衆多の眷屬を率ゐて逼りこころむるも、時に大地震ひ轟き毒箭の風に刀劍の雨をふらし力をつくすも、大ボサツの金剛の意志をば毫も動かすこと能はざりき。つひに之を制伏するに智力を以てしてまた魔をして再び起つ能はざるに至らしめぬ。

臘月七日の夜に於て天魔を降伏して金剛定に入り、初めに天眼を得て空間を盡して現はれつゞきて宿命通は時間的に過去未來を通じて知り、後明星ほのかに出づる時に正しく無上正覺を成し、無明の夢さめて宇宙の眞理として證得せざるはなきに至る。已に正覺を成じ已つてより初めに華嚴三昧海中の高談には法身の大ボサツ等を利用しつぎに鹿野苑に於て五比丘を度し、大悟の曉よりネハンの夕に至るまで五十年間の教化は諸國を經めぐり、無數百千の弟子を度し、所謂の比丘比丘尼信士信女其かず量りなし。

金の言の葉とは、佛陀は生涯の言行は一の缺點なく完全圓滿なる道徳は實に悉く一として模範ならざるなし。五十年間いかなる境遇にも意志を變じ給はず、健闘に於て全勝の凱旋をなしたる、八十にしてクシナのバッダイ河の邊なるシャラ双樹の間に於て二月十五日夜諸の弟子らの爲に遺誡したまひ、深禪定に入つて有餘依の身を棄てて大涅槃界に歸したまふ。

佛陀が自ら本地眞實を示し給ふ法華壽量品に、意に曰く、我人中に生じガヤに於て初めて正覺を成じつひに涅槃に入ることは衆生が感見するかりの依身にて、我眞實の法身は無量壽にして久遠より如來なり、久遠劫に滅することなし。たゞ衆生の爲に方便して教化の爲に出没するのみ、衆生が肉眼に感ずる世界は時たらば滅すべきも、我眞

實常寂光土は常住安穩にして天人常に充滿せり。園林諸の堂閣種々の寶を以て莊嚴す。我は無量光無量壽如來なれば常住に此に住して衆生を度すと。言を換へて云はゞ我が眞身はアミダ如來にして永恆淨土に安住するなれども、衆生は無明に隠れて之を見ることが能はぬのである。

宇宙は人間の感見に現象界轉變無盡にして生滅變易なれども、如來の佛眼で見れば宇宙全體が本來常寂光土即ち極樂淨土にて眞善美の靈界である。

然らば衆生は宇宙精神なる如來法身より出でまた如來の聖き靈界に歸することを得るとせば、何なる方法を以て之を得べき。答て曰く、其方法の中に於てシヤカ本懷としたる法華により、一心に佛を見んと欲して、三身一如なるシヤカの本體即ちアミダの聖名によりて聖旨の現はれを念じて止まざる時は、三昧定中に於て其法身三十二なるを現して、この靈感の知見により心靈更生して有餘の身は變らざるも心は寂光土にすみ遊ぶ。

已に更生したる心靈は清く深く潔く無限の泉源より靈福は感じ有餘の依身を脱す。以後は無爲の都にして一面は常樂我淨極みなく一方には化身を出して世界人類をすくふことをう。

涅槃の大道をさとり給へば一切の衆生を引導して大道に歸入することを教へ給ふ。ネハンとは即ち寂光土また極樂淨土なり。故に釋尊教化の目的は一切を攝取して極樂涅槃に生ぜしむるにあり。

### 如來の勢能

如來の勢能は常恒に流行し不斷に照して人の意志を警策し、眞理の指導により無上道に向上進趣せしむるの勢能なり。吾人は肉による心は歴縁對境、動もすれば貴重なる光陰の珠徒らに塵埃の中に葬らんとす。時に當つて如來の神聖より放ち來たる不斷の光は吾人の意志を警發して向上の正道に進ましむ。

不斷光は時間的の寸陰を唐指せざらんを教ふ。空間的に少罪を犯ざらんことを示す如來の神聖、正義、恩寵より起し來りて人の意志を警覺し行動し靈起せしむるの性能なり。

### 願行

菩薩は願と行とを以て自己の生命とす。現在より盡未來際に至るまで、衆生無邊なれども誓つて度せん。煩惱無邊なれども誓つて斷ぜん。法門無盡なれども誓つて學せん。無上菩提をば誓て證せん。乃至、普賢の行願生々世々常恒に諸佛を勸請し、諸佛に親近し、諸佛を供養し、乃至、一切の法を學び、一切の行を修し、一切の衆を度し、如斯誓願虛空法界盡んも我願は盡きること無らんと。

諸佛に十八不共の法あり。是菩薩になき所なる故に不共と云ふ。中に精進無滅欲無減と云ふことあり。諸佛は已に無上菩提を得て一も圓滿ならざるはなし。然れども精進無滅にして常に勇猛に勤修し、欲無滅にして徳を積み功を累ぬること限りなし。諸佛已に爾り、薄地の凡夫何を倣はざらんや。

### 四 攝

- 一、布施。しきほどこす。おもひやりて人にほどこす。
  - 二、愛語。人をしんから愛する心から出づることば。
  - 三、同事。おもひやりからして、彼と同じようになりてなすこと。
  - 四、利行。人に利益を興へるおこない。
- 布施に三種あり。財施、法施、無畏施なり。



### 五十七

拜啓、佛世尊は此の世の中の事を劇惡極苦の中に於て勤身營務せりと説きたまふ。まことに然り此間の程は遠國の大水地震の災告は餘所の嘶しとかたりしに、何所か娑婆の苦界にあらざらん、此處に吹きくる大風のために大に人心を恐怖せしむる有さま曠荒たる原野ははげしく屋宅にあたる爆たる音はいかづちの如し。きも落ちたましひ消えんとするが如し。

佛の曰く、三界は安きことなし、猶火宅の如し、と。此の地の荒々たる如く御地の景容如何に。昨夜より悄然として愁ふ。安否香否を慮るなり。幸にして此地には大なる害は免かる。先は安心したまへ、幸便により御安否を伺ふまじにしめすこと如此謹んで具す。

二白、風が悪しきまゝ定めて潮水も出て御邪魔せしことと奉案候。

### 五十八

御地より歸りにし十三日四五の三日の間は村内一度まはりまた經をよみなどするより、十六日には小金なる木山にて施餓鬼會相勤め、十七日流山、十八日には白村の施餓鬼、本年は都合により二十八日まで延ばし候。十八日、十九日平方新田にて久しく無沙汰により不足申され候よしとて彼方にまゐり、十九日岡田家より蒸氣にて松戸まで降り法會相催し候。廿日鷺野谷村醫王寺施餓鬼相勤め、此夜より有志の輩續々参り法益を乞。元來此鷺野谷といふ處は日蓮宗あり眞言宗あり淨土宗あり又ヤン宗あり淘宮と云ふ一流のものあり、みな共に農業の間には集りて其の道を學ぶ。故にたとへ説教をするにも因縁咄しなどは好まず。日蓮宗の信者は法華の講義を望み、眞言の宗徒は其宗意を尋ね、淘宮の學者は又其學説をたづね、各々自分の信ずる處をすぐれて他の道は劣れりとおもへり。依て小子が此里に來れば皆きそひ参りて其道をたづねらる。予は各其間に答ふ。何れも道に志して尋ね來る者は年二十歳より三十四五歳までの男子のみ。廿日の夜は法華經を誦じて十二時過に及ぶ。聽衆は二十人ばかり。眞言や其他の人も皆聞く。廿一日は晝十時頃より始め、或は釋迦の傳諸宗の傳來等をたづねて夜の十二時過に及ぶ。此夜は三十名計り、何れも皆男ばかり。廿二日には同村眞言宗の寺に法會あり。眞言の僧四名計り來り何れ此所に小子を招きて眞言の起り傳來を尋ねらる。眞言の僧かたわらにおきて悉く眞言の宗意と傳來とを説く。十二時過に至る。廿三日には醫師染谷氏の請によりてまた一日の法話、廿日より一日片時も法談に暇なく此村里の人は元より里談その他書物にて志のもの有りといへども法門上に斯の如く志の有る人多きは（不思議に思はれて皆慕うて若き男子が（るは感心致候まゝ小子法談のおほりに臨んで皆々に向つて云へり、某廣く諸方を遊化すと雖只説教の座に列る者は多しといへどもひそかに尋ねて此法如何此道如何と斯の如く道をたづねて志有るもの多きは感服し候。小子が身に取りていかばかり尋ばしく

存じ候と申ければ、皆曰く、全く貴僧如くであればこそあり難き法にあひき、難き道を聞くこと村内皆々の幸の上なしといはれたり。村里の人は、この村里に貴僧あればこそ鷺野谷の名義ます、遠近にひびく、ひとへにこれも村内人民の共にひかりをうけることよろこばしく存じ候。鷺野谷にて日々人々尋ね來りて法談等にいとまなく申上ることもあまりにおくれていかどかと存じ候へ共、小金にて學士のために講談することもまた出來ず、今日は風邪の氣味にて熱も發し休み居り候ま、そのいとまにて書きはべりた事もたゞ勝手の事のみ、歸りにも其日より日々せはしなくうたななどをよみはべることも能はず、只此わしの谷の里に來てみなよく法門に志しの有る人多く出來るが小子の悦びにて候。小子がたはむれに書きしものまで皆あらそひとりて珍重いたし候。我父母にも久しぶりにて相見えしにそれみた、今年も去月初日來三十あまりの日病にふし、すでにこの世のいとまにもやと思はるゝほどなれども、あつき看病のためにとく快くなり候。全くおかげなりとこまやかにかたりしに、ともにかたじけなき感じなみだにもむせぶと〇〇に相見え候。(明治二十一年)

五十九

本日はよき御天氣静かなるあつき日によふ皆々様御氣嫌の程喜ばしく存じ參せ候先頃まかりうかゞひ候時はあつき御もてなしすなからざる御惠すぐにも御禮迄に申上べきの處遂にさまぐの事によりまされれ後し故にとりあえず御禮迄申上候。こなたにも常にかはりしことなくねつおきつ、日を暮してまかりありさふらふ間御心をやすんじ參らせたまふやうにこひねがふ。さては頃しもあきかせの涼しき時よふみな々様御身御保養ばかりをひとへに祈りつゝ我にも。(明治二十一年小金の寺より本所御川路木様)

六十

晝爲ニ大衆ノ講ニ經論一 夜在ニ禪床ニ觀ニ心月一

只毎日學問修行の者のために朝には早くより夕にいたるまで講釋を致候間御安心可被候。戯れに云ふ、稀しい事を御話申ませう。今朝初めて辨樂朝早く起きました。田舎の珍らしい話はこの様なもの、新聞にもないこと、おかしくば御笑ひなされ、ばかな事を書たとおこらつしやるな。

六十一

秋の夕暮ものさびし、くさ野にすゞし風ぞ吹く、啼く蟲の音も聞く度に、今宵限り悲しげに、思へばぬる墨染の、袖には秋の露うけて、乾かぬ間にぞわたる、雲に月影眺むるも、千々にもこの悲しけれ、ことに更けゆく夜の空、如何にいたまし思ひこそ、雲にかくるゝ月ぞをしと、心にしみて洩とも、いふべきこ夜の雨もかな。

六十二

法のためまた學問のためにとて(我身には)ひとの如くに暇なかりけり。本月中に講釋は終ります故來月二日頃は説教所へ歸ります間、其時分は初算狩りに皆様御出成可被下候様御待申上候。本月中に出頭致すべき様過日申上。また講釋も是非本月一杯致すつもり故是非なく候。(明治二十一年 小金東漸寺中)

六十三

御寒さに相成候折皆様御氣嫌克被遊御座候條奉賀上候。過日は御禮申上候。私事三十日千葉に參り尾崎醫部方に滞留し、警部劍道師醫士の衆等かはるゝ殊の外皆々喜び候。又監獄の監守長にも對話して色々話候。醫士或は官衆等なり晝像其他細字の類多く頼まれ候へ共、此際は何しをせはしく候間、後に行く事に申置、昨

日船橋迄参り、諸方にて結縁し、是より堀江の方へ行くつもりに候。一日には上總の八幡まで請招になり参候。何れにしても又々参り候間御度は御免と申置候。私がか心にしみく悲しいのは裁判官の堀井正則君名高き學者なり。何となく道の話に早くより申の暮るゝを忘れ三日許り對話致し候。別れの時分にも名残りを惜しみ、又度々来る様にと私の手取りて云ふに、初めて君を見るや、温かに小兒も近づくと、其れ自ら恐れず屈せざるの相あり。語は啞すと雖も自ら心の深さを知る。ながく朋友のちなみを結び、共に道を樂しまんと、如何にも心深き人なれば、御別れ申してより私も慕はしく存候。私と同年の人なり。

六十四

蒸せるあつさも過にけり、今は時しもいにしへの、よみにし歌の秋來ぬと、目にはさやかに見えねども、吹くる風にぞおどろかれ、朝な夕なのすゝしきに、( )きみにはやすらかに、わたらせ給ふぞめでたけれ。

止宿中は言葉につくし難き御厚情のことども(はかく)病氣中の御恩有がたく涙のみ。累ぞめの身も今は健やかにまいり候間御安心下され候。先日は御送り被下有難奉存候。白は十三日より十五日三日間は草村の草をふみわけちりの中をまはり十六日には早朝小金施餓鬼今日は當所へ人々尋ね來るやう、何かとしばしのいとまなく、皆様にも御禮まで申上候葉書なり認むるひま無きまゝ是なり廿二、三日時分までは日々はせ廻り久かたにて尊顔を拜し奉つる如來さまへ静かに拜し得ず。後日認め申してこましく御話候。

六十五

時下御寒さ相増候處皆々様御機嫌克被在候條奉賀上候過日御歸りの節は如何にも失禮なる致方御高免可被下候。

如來様は堀井の東覺寺に安置候まゝ小子の身は浮雲の風次第本年中はドンナコトニナルカ、ワカリマセンガ何れ其中にウカガフツモリ。皆様ゴキゲンヨ

六十六

稍々暖に相成候處皆様御機嫌如何と存候。此程中は御手厚情のほど御禮申上候。御わひしく御愁慮のほど奉察候へば、いかゞ御座候哉と日夜に案居候。私事御地より歸りて小金にて用事をなし、夫より近所のでうしやの病氣を何ふに少しよくなり候得共、病人もしきりに待暮せし様子、夫故病人の心を察して四五日間もさまゝ話をせしに、大きに快くなりました。鷺野谷村へまかり出しに徳乘氏の父御も相はて、丁度その所へゆき、まことに諸方にて心を痛め、諸共に沈むやうに思はれ御家の事なども案じられ候まゝ、早く御地へ巡行致し度存候へどもまゝならぬ習ひかへりて其日より心のはれし日もなく、始めて今日船橋まで出掛、此邊にて結縁すみ次第、追々御地へ巡行候事、取敢えず申上候。

六十七

今日は結構なる御天氣に相成候。此間中は御厚情添けなふ御禮申上候。私は田中様にて二夜寫書いたし、夫より小石川宅藏司いなりさまにて書寫致居候。明日は早くに神田橋本町富田様まで出まゐり候。御老母様御出下され度候。御經の善光寺如來おり表具五十程御持参下され度余は拜顔萬々。(明治二十三年)

六十八

拜啓、いまだ餘寒さびしく候まゝ、皆々様御機嫌よく御座被爲在奉賀上候。過日中は御厚情奉謝候。本月十一日迄にむねあげ致候。私も此間のほどは流行の風にて五六日をされましたが其内諸方へ出向て只今は松戸にて結縁仕候。



六十九

拜啓、皆様御きげんよく御座あらせられ奉賀上候。陳者もはや十夜も近ぶき歸京すべき筈の處、もはや當地の布教も來月十日後までの日割にて、既に廣告に相成、夫より亦々定まり、ドウンテモ歸る事出来ませぬ故、甚だ不本意に候へども是も法のためならば御免可被下候。皆様へ願ひ此地の衆人は又の結縁は出来ぬ事故衆人の悦び、皆さまには又々面會も出来候へば御察し被下度候。宜敷。(明治二十六年加州金澤大開寺にて)

七〇

此頃不勝の天氣のみ續き候處、皆々様御機嫌克爲在御座候條奉賀上候。小子も無事に布教候間御安心被下度候。日々せはしく少しの間もなくために御無音、是より三日間の後加州金澤へ移りその地方にて結縁するつもりにて候。皆々様へよろしく過日來非常の大水にて御地方は御困難の事新聞にて承知致候。定めて一時お困りと遙に御察し申上候。しかし皆様御健康案上候。(明治二十六年越中石動大念寺にて)

七十一

過日來御厚情謝上候。御地を發して其夜久喜の下早見吉澤氏へ一泊し昨日西那須より當處へ着し候。當所に於て一週間許り湯治のつもりにて候。當地は氣候はよろしく候。書餘後便、皆々様へよろしく。(明治二十七年九月一日野州鹽原温泉湯場精屋にて)

七十二

拜啓、小僧病氣大によろしく候。昨日鹽原より當所まで歸り當寺に泊り尙少しの間當所大ひら山(カツケニ氣候ヨロシキ所)に家中村、渡邊氏の別荘あり、之にて療養致しなば充分よろしかるべしとの事により、また彼岸になれば、當寺にて結縁いたし

夫より歸京致すつもりにて候へば、皆さまによろしく。(明治二十七年九月栃木にて)

七十三

拜啓、先ほどは御せはさまかたじけなく奉謝候。出山の釋迦如來あと多く書てそのうちに宜ろしいのを學校へ進じたく、先のは少々氣に入らぬ所有故經師を御見あはせ下され候。あれは外へあげませう。

七十四

拜啓陳者昨日午前八時横濱を發し只今年前十時當港へ着し候。船中日本人一人も無之支那人に日本語の通ずるものあり話も出来候上海まで私が世話致しますと語り候。先は勿々。補様へよろしく、皆様へよろしく。(明治二十七年十二月十六日神戸港より)

七十五

拜啓過日は御手数數奉謝候。陳者兼ての山陰なる因州より此程返報あり至急出立候よふ申越候へども邪氣のために延引漸々日が迫り候へば今夜九時の發車にて出立の事に決し候。神戸より姫路夫より二三日間人力にて越し候。様子、十夜には是非歸京仕候。日もつまり候へば大阪へも立寄る事むづかしく候へば堀井氏へも此段御通知下され度、出立に際し昨日まで必要なる事業にかゝりやうやくと今日出立の運びにつく事に相成候。(明治二十八年九月廿頭寺より)

七十六

殘暑きびしく候折柄如何被爲在候哉候。今夜御伺申候。小野さんも御宅に見へ申候。私よりはかきにてしらせ申候。

七十七

拜啓、秋收の候皆様御機嫌克被爲在候條奉賀候。去月出立の際至急に相成當地に着するや日々多忙のため御無音候。當地は本月三十一日迄に狂舞二日當地を發し四日には歸京の事に決し候へば御安心被下度。(明治二十八年十月鳥取市玄忠寺にて)

七十八

其後は御無音に打過候。懶怠奉謝候。此程中大阪にて殊の外長びき五日漸く西京迄着し、至急歸京すべき心組に候へども、此夜ステイション迄出向たるに乗おくれまた今日は當所は大きな地震、夫がため途中蒸氣線路破壊して汽車止り候まゝ、不得止事通行するまで延引候。モハヤ十夜も近よれば心には掛候へども據なく候。見るに付、聞くに付恐しき世の有様死を免れて今日全ふして居てこそ幸と云ふべし(明治三十四年十月三十日西京西非方)

七十九

無碍光の中に御互に廢事なくうちすごし候。事感謝候。今日御うかゞひ度存候へども出兼て候。問豫て小野君よりの御經市中荷物配達便にて御届け申上候。御家までとゞき次第先方に願度候。甚だ御手数數乍らいつぞやの觀音菩薩のきぬを當山まで御届下され度願入候。(明治三十六年淺草櫻願寺にて)

八〇

拜啓、漸く春和の候に相成候。處皆々様御きげんよく御座あらせられ恐賀に奉存候。小子一昨日神戸港に無事に歸着候。すぐに歸京すべきなれど今回はちよつと布教上必要のものをこしへるまでに歸り得しなればしばらく此地にとゞまりそれより歸京候。間左に御承知下され度皆々さまへもよろしく桶様へもよろしく。皆様へもよろ

しく。皆様お變り御座候はゞ聞知仕度候。先は早々。(明治三十八年三月西京にて)

八十一

拜啓、過日中は厚く御世話様辱なく奉謝候。陳者明十一日御宅の方に御差つかひなくば鈴木慶次郎様方へ參ることに致度存候。御差つかひなくば甚だ恐入候得ども先方へ御一報直ぐに御出し下され度願候。私より直ぐ出してよろしく存候へども御宅の方の御都合明日にてわるければ哲願寺宛御一報下され度、なければお出しに及びません。明日私は直にまいりて晝のうちに書きまして、皆様はいつ時分からよろし御座りませうか。甚だ恐入候得共時間のよろしき時に御集り下され度、御近所の衆もどうか御きかせ申度所存に候。夫れに罷を御用意願候。

八十二

今日はすゞしくなり候。皆さま御きげんようあらせられよろこばしく存候。此ほどは御厚情奉謝候。五香の施がきは本月十五日に執行いたすことに定り候。只今の處では村内だけのこと故たゞ眞實に勤るばかりに候。石川氏の件は荒井氏より親父の方へ篤と相談し候。親父も承知いたし候。荒井氏深く心配致し又もや御さいそく有ては痛心なりとても申候。其件は御心配には相成りませぬなり。

八十三

われらがむねのほのほは  
如來の御めぐみのたきつせによてすゞしかるべし。

われらが心の垢は如來のみむねのいづみによりてきよめらるべし。

### 八十四

拜啓、御寒さの御障りも御座なく歡喜不斜候、小子日々授戒等せはしなく候、陳者此下句には駿河行きにつき二十七日までには此地を仕舞、二十八日頃御宅へ立寄、夫より駿河へ行度存候。就ては先月申述候祇子(けさのやうなも)大はゞものにて鼠色なり木らん色なりにて御仕立下され度候。急に相成恐入候得共駿河へゆくにけさがきれて候へば何卒御仕立下され度候。また吉田町にてけさを一領下され候よし是もその時分までに御宅へ御取寄せ下され度候。同じものなればその方でありがたくと奉存候。

### 八十五

拜啓、過日は御來向のことにつきては急の最たる、己が頭燃をはらふよりも尙切なるべきに大に延引候こと慚恥に堪へず候へ共、日々布教のためつかのまばかりもいとまなく(後もなり)明日は本所へまわり候。御状によるにこの頃御病氣のため厭欣のころ切なるよし。そは實有りがたきことにて候。生死事大無常迅速。

### 八十六

愛染明王の尊像すでに拜寫し終ぬ。わづか一日にて二葉成畫になりぬるものをながく延おきたる事勿體なく存候。もはやはつたけも澤山ですすゆへ、皆々様にて御出は早く御急ぎなされ候。

### 八十七

夏の日はかきりありしとするものを  
心あらばしづかになげよ夜の蟲  
なにおどろかす秋の小夜風

人はかなしき秋にぞありける

一、註——以上五十より八十までは明治二十一年頃より明治三十八年頃まで東京鈴木家宛



昭和七年八月十三日	印刷	誌代郵税共
昭和七年八月十五日	發行	年二四
編輯人	山崎 辨成	
印刷人	小林 七太郎	
印刷所	靜文社 印刷所	
電話牛込五四一九番		
東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地		
<b>ミオヤのひかり社</b>		
振替口座東京六八五一番		